

高知病院の目指すところ

私たちに多くの感動を与えてくれたリオデジャネイロのオリンピック、パラリンピックも終わり急に秋らしくなってきました。職員の皆さんには開院記念式、地域医療連携連絡会議、日本医療マネジメント学会高知県支部学術集会など病院関連の多くの行事が短期間の間に集中して開催されたため多忙な夏であったかと思います。本当にご苦労様でした。旧国立高知病院と国立療養所東高知病院が統廃合し新しい国立高知病院として開院したのが平成12年10月1日でした。この年もオリンピック年であり第27回のオリンピック、パラリンピックがシドニーで開催されています。9月24日女子マラソンで高橋尚子さんが金メダルをとったときですが、ラジオ放送の実況を聴きながら高知道を走っていたのを思い出します。その後アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロと開催され高知病院が開院されてから5回のオリンピックを経験したことになります。オリンピックは4年に1度の開催ですので、高知病院もこの10月1日に開院16周年を迎えることとなります。この間国立病院は平成16年に独立行政法人化され平成27年には中期目標管理法人（非公務員型）となり体制も大きく変わってきています。高齢化社会を迎え医療環境も大きく変化しこれに対応するべく地域医療構想が発表されました。地域医療構想とは団塊の世代が後期高齢者に移行する2025年における医療需要を予測し、医療需要と患者の病態に応じた病床バランス（必要病床数）を想定し医療提供体制を見直すことで、行政主導の病床再編、病床削減計画ではないといわれていますが、人口減少も進んでおり適切な病床数に誘導されていくことは間違いありません。高知県では高知病院が属する中央医療圏に医療機関が集中し病床の過剰地域で、回復期病床のみが不足している状況といわれています。特に高知病院が医療機能として分類される急性期は必要病床数の約2倍の病床あり削減が求められる可能性は高いと思われます。今後、医療政策の変化に伴って病院経営が困難となる病院が出現してくることが予想されていますが、このような環境の中で高知病院も運営をしていかなければなりません。国立病院機構の病院は基本的には独立採算制で高知病院も経営状態が悪ければ存続できなくなることは以前より指摘されていますが、どのような環境にあっても高知病院を守っていかねばなりません。現状では非公務員型になり、病院からの支出が従来からの拠出金に公経済負担、整理資源、労災保険、雇用保険の事業主負担などが追加されたため病院経営を圧迫するようになり高知病院も厳しい経営状況に直面しています。もちろん、病院は利益を上げることを目的にはしていませんが、経営基盤の確立なしには安全で良質の医療を提供することはできません。地域医療構想のなかで高知病院は現在の病床数を維持して行く予定ですしそのためには患者さんに信頼され選ばれる病院にならなければなりません。医療環境がいかに変化しても高知病院が存在し続けるためには一人一人が高知病院の職員であるという自覚を持ち患者さんに心のこもった医療を提供することが最も重要なことと思います。皆さんと一緒にこの逆風の中、高知病院を今まで以上に発展させていきたいと思っていますのでよろしく願いいたします。